

〈研究ノート〉

「行動する保守」の論理(7) ——右翼に弟子入りしたη氏の場合——

樋口直人（徳島大学）

1. 問題の所在

本稿は、「行動する保守」として排外主義運動に携わるη氏（30代男性）に対して2012年3月22日に東京で行った聞き取りを、読みやすさを考慮して再構成したものである。彼は、国家社会主義者同盟というネオナチを掲げる団体に加入し、外国人労働者排斥を訴えることから活動を始めた。なぜこうした活動に加わり、さらにそれが在日コリアンや在日中国人の排斥へとつながったのか。

筆者は排外主義運動の活動家に対して調査をするなかで、最大手とされる在日特権を許さない市民の会の活動家に対する聞き取りを、「在特会の論理」としてまとめてきた（（樋口直人「在特会の論理（1）～（7）」『徳島大学社会科学研究所』25号、「在特会の論理（8）～（9）」『徳島大学地域科学研究』1号、「在特会の論理（10）」『アジア太平洋研究センター年報』8号、「在特会の論理（11）～（14）」『徳島大学地域科学研究』2号、「在特会の論理（15）～（18）」『徳島大学社会科学研究所』26号、2012年）。在特会以外の団体を主な活動の場とする者に対する聞き取りは、「行動する保守の論理」としており、本稿は後者の一部となる（樋口直人「『行動する保守』の論理（1）～（3）」『徳島大学地域科学研究』1号、「『行動する保守』の論理（4）」『茨城大学地域総合研究所年報』45号、「行動する保守の論理（5）～（6）」『徳島大学地域科学研究』2号、2012年）。以下では、η氏の言葉をそのまま用いて活動家としての経歴をたどっていきたい。

2. 「外国人問題」への関心

（生まれた）周辺の環境というのはどういふところかと申しますと、非常に工業地帯が多くてですね。在日も多いですね。同級生にもいましたし、上級生下級生にも当然いました。ちょうどバブルの頃に——私は中学生くらいなんですけど——近所の工場でイラン人を雇ったとか、中国人を雇ったとかそういう話がありまして。最初（に関心を持ったの）は外国人、工場で雇っているといても不法滞在で、ブローカーが会社に連れて来て使ってくれないかと、そのなかから雇用者が1人だったら採用しようとか、2人だったら使おうとかいう具合ですね。

外国人労働者使ってる雇用者が、会社の中でこういうトラブルがあったとか、こういう問題があったとか……。非常に外国人は扱いにくい、なかなか一筋縄ではいかない。例えば社長の言うことは聞いても、専務とか部長・課長の言うことをまったく聞かない。外国人の側からしてみれば「あなたはボスじゃない、俺のボスじゃないのになんでお前の言うことを聞かないといけないんだ」。社長のいうことは聞くけど他の幹部は無視して、他の社員とトラブルを起こすような、そういう事例が——大人同士の会話であったんですけど。私も子供心でそういうのは話を聞いていまして、これはなかなか一筋縄ではいかないんだと。

うちの親父なんか会社経営してましたし、そういった近所の主婦同士の付き合いですね。奥さんでも会社の経理を手伝ったり会社に関わってて、会社の中で起きるトラブルというのは、はしばしば聞こえてきますから。（両親は）そんな（排斥的な）考えは持ってなかったです。トラブルがありながらも使っているという周囲の状況は、逆に私のほうが度し難かったですね。トラブルが起きるくらいなら、最初から

使わないで別の方途を考えればよかったんじゃないかと思いますけどね。

バブル期で日本中どこもそうだったと思いますけど、外国人がどんどん身近に入ってきた。例えば自分の近所で入管の手入れがあったとか、そういった話も聞きますね。田舎町で、あんまり事件というのは珍しいものですから。当時、私が19歳になったころなんですけど、関西国際空港というのが開港しまして、これが国際化であるとかいろいろ言われておったわけですけど。このまま外国人がどんどん増えてきて、日本という国の形ですね、これまでは日本人同士で学校行っても日本人ばかり、会社に行っても日本人ばかり、地域の中でも同じ日本人ばかり。それが当たり前だと思って僕なんかも育ってきたわけですけど、だんだん外国人が入ってくることによって、「これどうなっていくのかな」と心配になりますよね。自分の地域の町でもそう、外国人とかどうしても目にしますから。中国人、イラン人、南米系も増えてたんですね。やっぱり、このまま国際化国際化といってどんどんどんどん無制限に増えてくると、これはちょっと大変なことになるんじゃないかな、というところから僕は関心を持ったわけですね。

当時は（排斥的な考えを持つ人は）まったくなくて、むしろ外国人を差別しちゃいけないとかいうような風潮で。工場なんかでは逆に不法滞在者でも使っているくらいで、外国人を排斥しようとか、トラブルがあってもどうにかしようとか、そういう懸念がまったくないものですから、これはなかなか大変だなと。学校の教師も教えてくれない、地域の大人も教えてくれない、当時はまだインターネットもないと。

私の行った会社——大阪にいた頃は2つくらい会社勤めしましたけど——そこで特にはなかったですね。（自分が直接）接することはなかったんですね。自分の勤めている会社の中にはいなかったのですが、例えばそこからどこかに派遣されたりしますとね、その先で大きな工場で南米系労働者を使っているとか、そういうのはありましたね。ただやはりどうしてもそういう問題が起きたりしますし、犯罪も起きたりしましたから、問題だなというのはずっとありまして。どこの社会の階層の中にもいずれ入り込んでく

る、学校にもいるし社会にもいるし地域にもいるし。やっぱり国の形というのはどうなってしまうのだろう、すぐに追い出せなくても、本来的には国の形でそうあるべきものじゃないというのを発していかなばならないと思いまして。そうすると一朝一夕で片付く問題ではないし、自分の一生をかける価値があるのかな、この問題に。それからですね。

3. 政治への関心

政治というよりも、多少なりとも——長くはないんですけど、防衛問題とかですね、その辺ちょっとどうしても国を守るとかですね。そういった方面には関心がありましたね。防衛・治安ですね。当然その中には政治というのが深く関わってくるわけで、ニュースなんかでやっていることに対しては多少なりとも興味はありましたね。単純な話なんですけど、どうしても男というのは強いものにあこがれるじゃないですか。いかに反戦教育の中でも、自衛隊基地周辺を通ったら艦船があるとか、自衛隊の何かあるとか、自衛隊の車両が走っているとか、そういうものに対しては関心をひかれますよね。単純なことではあるんですけど、国を守る人に対するあこがれというのはありましたね、下地といいますかね。

一般的な中学生と志向が違って、当時から映画でいいますと戦争映画とか、そういうのがすごく好きで。自衛隊とか軍隊に関心持ち続けてきましたから。ただの中学生がずらっといて、その中から自分なんかはみ出てる存在ですからね。どうしても大人としては余計なこと言わずにこっちに入っとけと。そういった出る杭は打つというんじゃないんですけど、はみ出てるものだから、どうにかして・・・大人からみればそんなだったかなと。

誰しも関わってくる問題じゃないかと思いますが、教育界というのは左系とかああいうのが多いですから、特に社会科なんかそうですから。これは中学生の時から高校生に至るまで、教師と生徒という関係でもそうですし、個人的にもかなり折り合いが悪いような部分というのはありましたね。向こうもこっちが右的な要素があると思ったのかもしれないですけど、あま

りこちらに対しては快くないような姿勢というのはありありと。社会科だけでなく英語の教師にしたって、これからの日本は日本語ばかり使っている時代ではない、どんどん外来語が入ってきて、いつまでも日本人が日本語使っているとは限らない。それを肯定するような言い方で、こういう言語をどんどん破壊していくような、かなり危うい教育方針といますかね。危うい思考だなと。それに対する反発というか、心の奥底に忤ねたるものがありましたね。

（皇室に対する関心は）あの当時は——今もそうなのかもしれませんが——関心という部分では特には……あまり意識というのはなかったですね。ただ、社会科の教師はどうしても授業のたびに例えば歴史とかじゃなくて地理の授業とか、全然そこに何で今の皇室の殿下の問題が出てくるの？という場面ですね、非常に口汚い言葉で皇族の悪口を言うわけですね。天皇陛下にしてもそうですし、皇后様にしてもそうですし、皇太子様、内親王殿下……こういった人たちのことを個別に口汚く罵るようなことを言うものですから、それに対する違和感は確かにありましたね。この教師、このおっさんはなぜこんなことを言うのか、ここまでこの授業で言う必要があるのかなと。子供心にそういう違和感といますか、そういったものはどこかで——僕だけじゃないかもしれないですけど——感じたのはありましたね。

あまり自民だとか当時の野党に対してもそんなあれ（思い）はなかったですけども、必然的に国を守る自衛隊となりますと歴史とか政治とかそういうのはもちろん出てきますから。愛国心の現在の行動の下地になるものはそのころにあったんでしょうね。主に投票してきたのは、やはり自民党であるとか、まあその辺ですね。あとはまあ、非常にマイナーな存在なんですけど、維新政党・新風ができてからそこにも入りましたし。だいたいその2つくらいですかね。

4. 大阪から東京へ

当時は会社勤めを大阪でやってまして、その時仕事の関係で夜の勤務で、休憩室——夜の休憩の時間帯ですね——でテレビを見ておったんですけど。その頃、TBSのスペースJというニュース

番組がありまして、そこで国家社会主義者同盟というのが——日本にもこういう人種差別、民族差別をするような極右団体があるということで取り上げて。批判的に取り上げられておったんですけど。（国家社会主義者同盟が外国人労働者を取り上げたのは）90年の前半くらいです。90年とか91年とか、そのくらいからやっているってことですね。

まったく外国人問題に対して懸念を表明する大人がいない、怒りを主張するような人たちも存在しないという中で、日本にもこういう考えを持った人たちがいたんだと。そういう躍動感がありまして、これはもう自分もこういうところに参加しなければと。大阪というのは当時周囲に同じ考えを持った友達もいない、そういう団体も組織も存在しない。そういう中で、そういうところに入って戦わなきゃいかんと。下らない会社勤めでこつこつと——やっている人には申し訳ないけど——日々の生活を考えて、というよりもこういう国の国難といますかね、それに逃避せずに向き合うにはそういう運動に入ることだなんて。

その翌年なんですけど、会社辞めてこちら（東京）の方に訪ねてきたのですけどね。団体（国家社会主義者同盟）の当時副代表であった瀬戸弘幸と偶然に、訪ねた時に接触することができまして。東京に生活の基盤とかないものですから、「それだったら俺のところに來たらいいいんじゃないか、來たかったら來いよ」ということで。それから1週間くらいたって、こちらの方に住み始めたという話ですね、17年前にここにきて。その前に右翼団体というのを見て回ったんですよ。本で見たり、あとは実際に訪ねてみたり、人とは会わなかったんですけど活動風景というのを見ようと思って。（大阪でも）いくつか見て回って。ところが休眠——開店休業状態というか、そういう団体も多くて。あるいは活動らしきことはしていても、外国人問題には触れていないと。これはなかなかあてにならないなと。そういう中で国家社会主義者同盟という関東で活動している団体を知りまして。

（活動家になることによって）一般的なステイタスというものが失われたというか、本当だったら会社勤めして結婚でもして今頃家族でも築いてたのかなと思いますけど。恐らくそういう

人生を歩むと、それはそれで幸せなんでしょうけど自分のなかでどこか物足りなさというか、大切なことをしてこなかったんじゃないかなと思いますし。今、こういう道を歩んできてそういったものは何も得られてはいないけども、自分の中で納得はできますよね。自分で選択してこういう道を歩んで。少ない人かも知れなくても、勇気を与えたといいますかね、人に。結局、自分のためにやってきたんであって、それが結果、人のためにもなったんだなと。もう1回二十歳の時点からやり直すとしても、多分こちらの道を選んだと思いますしね。

5. 国家社会主義者同盟と ネットでの活動

当時、活動らしい活動——月に1回集会開いたりですね、同じような考えを持った人たちが周りでできましたからね。あとは外国人に対する威圧、威嚇といったあれですけど、こういう勢力があるのを示すために街頭でのビラ貼りとかやったんですけどね。当時はビラの真ん中にナチスのマークがあったりですね、外国人でも一目でわかる、どういったものを意味するかと。(ナチスについては)学校教育でもなんでも、こういった層というのは悪なんだと言われてましたけど、私なんかそれほど学校教育とかで言われているほど悪いものだというあれはなかったんですね。むしろその、別の側面から教えてほしい、学校で言われているようなことでなくて客観的な評価といいますかね、そういったものは聞きたいなと思ってはいましたね。

何よりも同じような考えを持った人たちが——ちゃんと日本にもね——こういう考えを持った人たちがいる。ヨーロッパでは極右が台頭してますけどね、日本では今でもそうですけどまったくそういうものが存在しない。その中で、本当にごく少数、マイナーな存在といえどもこういうしっかりした考えを持った人たちがいたんだなと。妙な安心感といいますかね、そういうのがありましたね。決して自分で考えたこと、1人で考えたことは間違った方向性ではなかったんだと。

そこにいる人たちの質というのもありましたよね。(街宣右翼とは)まったく違った…。団

体に入っている人たちとはどういう人たちかというと、例えば暴力団員とか、社会の裏街道とか、そういうわけじゃなくてですね、普通に会社勤めされている、会社経営されている、そういった方たちばかりで。だからこそ、こういう人たちが主張するくらいになっているのだから、これは本当に問題なんだと、事実として問題なんだと。やはり自分の考えたことも決して間違っていなかったんだと、そういう裏づけといいますかね。新右翼の系統もなくはないですけどね、昔は一緒にやっていたという話ですから。でも、当時としては既存のもの(右翼)とは別に派生してきたような形で。

その当時は神田のほうに会社があったんですけど、そこでいろいろなことをやりながら(活動していた)。特に出版関係ですね、自分なんか携わったのは。そこで最初はベタ記事みたいなのを書くことから始めて。それでひたすらものを、文章を書くような、そっちのほうの仕事を。ほとんどその頃は(在日コリアンのことを)意識していなかったです。(関心があったのは)不法滞在ですね、当時は。それも実際、在留特別許可の付与だとか、国際結婚だとか、そういったものに関してかなり合法化されているんですけどね。

1997年——平成9年くらいから本格的にインターネットの方の活動をしまして。私が来てから2年弱くらいでインターネットを導入して、そこでホームページを作ったりして——政治的な。そこでどんどん主張していくような活動が始まりました。そこからインターネット中心の活動ですね。最初に目をつけたのはうちの先生の瀬戸弘幸っていう男なんですけど。先生がインターネットというものを早くから着目しまして、これはすぐに導入してホームページを作ってやっいてこうと、そこからですね。今のネット活動があるというのは、うちの先生の先見性といいますかね。そこによるところが大きいですね。(ホームページを)作るのは専門的なデザイナーとかプログラマーだったんですけど、そこに自分たちが主張していく。自分なんかの場合は仕事でも文を書くのが仕事で、それをそのままネットに転用できますよね。だから非常にいろいろな条件が整って入り易かったんでしょうね。

(運動がNPO法人格をとったのは)2004年です

から平成16年ですね。これを取得したときには団体の活動の趣旨というのも不法滞在——今も変わらずそうなんですけどね——でやってますし。当時はそういったものを主眼として活動やりましたし。(協力団体は)なかったです。団体としてはなくてもそこに属しているメンバーが外国人問題に関心があって、インターネットなんかでコンタクトをとるようになって、それで接触してこういうのを立ち上げる時に協力してもらったというのがありますね。でも団体としては存在しなかったですね。(法人格をとったのは)運動していく過程できちんとした法人格をとろうという発想からで、先生からの提案でしたかね、NPO取ったらいいんじゃないかと。

6. 「在日問題」への関心

オールドカマーにはほとんどふれない形で活動しているなかで、ニューカマーというのは何で来ているのかということを考えれば、やはりオールドカマーがいるからニューカマーが来た。オールドカマーは元々同和ってものがあったから来たのだ、と。すべての問題はそこに集約されるのだと。問題があって、表面だけを切り取って対象としてきたものが、根っこをどうなっているのだということを見ていったら、そういう構造に見えますよね。不法滞在の問題を追っていても、どうしても在日というのが関わってきますよね。支援している勢力に在日がいったり。人権団体、極左団体……恐らく中に深く関わっているだろうと。

私達の間でも問題関心というのは目に見えてわかる外国人問題、たとえば肌の色が違うとか、明らかに外国人とわかる、なおかつ日本に在留する資格がないものに対して「出て行きなさい、そんな不法滞在者を使っちゃいけません」とそちらのほうはどうしても主眼にきてしまって。在日というのは日本で育って日本語を駆使して、ほとんど日本人と変わらないものなんだ、と周りも私もそういう考えだったと思いますけど。それからネットが始まって、どうしても事実として起こったものを聞きますよね。自分たちが直面している参政権の問題だとか、その背後には在日社会の存在があると、そういうところからですね。

(「在日問題」に対して関心を持ったのは) ブログを書き始めてですから、2007年——平成19年か20年、そのあたりからですね。確かに国家社会主義者同盟に入っている頃も在日の問題とか言っている人間はいたんですけど、全体の中で1人か2人くらいですね。むしろ「在日、在日」と言っているほうが、「昔、朝鮮人にいじめられたんじゃないか」とかそういう風にあざ笑うような傾向があったんですけど。その次にネットをやり始めると、ブログやっていてコメント欄で「在日、在日」とひたすら書いてくる人がいるんですね。最初、「この人たちはなんでこんなに在日というのか」と思っている間に、自分のほうが「在日、在日」となっている。

いつ頃ってというのは、はっきりしたのはいないんですよ。何年何月の何日、在日問題に目覚めたとかそういうのではなくて、気づいたらなったというくらいですよ。ブログで書いたのは、ただ不法滞在問題を言うのもいいんですけど、そうしたらどうしてもコメントで突込みがくるんですね。その背後に在日のこういう問題があって、こういうことだからこういう風に主張したほうがいいんじゃないの、とか。そういう突込みがきて、むしろ発信している私よりもコメントしている側のほうが意識が高い、見識が高い、知識がある。逆に自分が教えられるような立場になるんですね。ああそうなのか、と。その中では、在特会に関わっていた人間もいるのかもしれないですけどね。お互いに研鑽していく中で意識が高まって。これは私だけでなく多方面で起きている現象だと思うんですけどね。

今度は自分なりに考えて、在日のこういう問題があって、そこに不法滞在という問題が発生していると。さらに意識の高い人が、在日もそうだけど同和って問題があって、それが在日のもとなんだよと。それがさらにこういう外国人の問題につながって、生活保護のこういう支出につながって、と。それを自分で吸収して、自分の言葉として同和、在日、移民だとか不法滞在の問題とかを書くんですね。どんどんお互いに侃侃し合って、さらに意識を高めていくと。そういった中でいつの間にか、気づいたら「在日、在日」と言っていた、「同和、同和」と言っていた。そういう感じですね、経過とし

ては。

7. 「行動する保守」

西村修平さんというのは、平成12年——もっと前から街頭でずっとやっておられた方で、その方の提唱によってちょくちょく街頭に出ようになったのですけれども。在特会が立ち上がった次の年から街頭でやり始めるという。それが最大で3日に1回とか2日に1回とかそれくらいの頻度で行ってまして、その頃からですね。で、街頭で行動したことをさらに動画とか記事にしてインターネットで伝えると。またより新たな賛同者が増えてさらに街頭の行動も大きくなって。

当時、西村修平さん、瀬戸弘幸、桜井誠さん、村田春樹さんとおられて、この4人が中心になって街頭でやっていこうとなりまして。その中でも研鑽といいますかね、お互いに感化され合う部分があって、いろんな意識を高める機会になりますよね。交流していくなかで在特会もそうですし、その他もそうですし、さらにお互い研鑽し合って意識を高めていったという、そういう話ですね。誰が誰に対してどう教えたということもないと思うんですね。お互いが刺激しあって、侃侃し合って。さらにそのなかで、「在日、在日」という主張がより強固になっていく、より大きくなっていく。治安だけでなく、あらゆる問題に関わってくる、政治、経済いろいろな問題に関わってくる。幅ってのは飛躍的に広がりましたよね。犯罪だけの問題というのは、この枠でとどまっているのを、在日、同和とそういったものがマスコミの報道にしてもそうだし、政治にしてもそうだし、経済でもそうだし。いろんな枠ができたという話ですね。

当時大きかったのは、4人の持っているそれぞれの良さというのが噛み合って、いろんな層を惹きつけたんだと思いますね。西村さん、桜井さんの関係でいえば西村さんのきちとした戦略、戦術。桜井さんの時々の話題に飛びつく即応性といいますかね。で、キャラクター。そういったものがうまく噛み合って両方の層を惹きつけたのかなと。言い方は悪いですけど、その場限りで「朝鮮人に出て行け」だとかそういう

ことを叫びたい人、きちとした民族意識にもとづいた運動をやりたいという人たちがうまく噛み合ったんだと思いますね。そこに瀬戸弘幸とか村田春樹とかそういった人たちのキャラクターも隠し味になって、さらに層を広げた。

(動画配信の効果は)全然違いましたね。それまでは、ただインターネットで情報を発信する、今度は街頭でやったことを映像化して文章化してそれをさらにブログで伝えると。さらにそれによって新たな賛同者ってのが街頭行動で、街頭行動がさらに大きくなりますよね。それをさらにインターネットで——動画で記事で流して——新たな団体が集ってきたり、その中から新たな団体ができたりと。(アクセス数も)まったく違ってきますね。最大で——たとえば普通に情報流している時が1千とすれば、街頭で行動した時は1万くらいありましたね。「このおじいちゃんもネットを見てたんだ」とかいろんなカルチャーショックはありましたね、最初の頃は。

もともとそういう在日問題もそうですし、外国人問題全般に対しても反発を持った人というのはいたわけであって、ただそういった情報を目にする機会が無かった、行動に参加する機会が無かった。それが私達のブログを通じて見られるようになった。今度はただ見て応援しているだけでなく、実際に街頭で自分も主張してみたい、行ってみたいとなりましたね。で、さらにいろんな人にまた別の人に呼びかけられて、その人たちがさらに来るようになって、さらに別の人が呼びかけるようになって、どんどん広がりをみせたと思うんですね。

(それまでは)集まって来る人間も本当にごく身近な人間だけ、見てる人間も誰だかわかる。それが街頭で行動するようになってから、「私はいつも見てる、コメントしてる誰々です」とか(あいさつしてきて)、そこから広がりが出てきて。サイレントマジョリティの意識を呼び覚ました、そういう情報を目にする機会がなかった、発信する機会がなかったところにそういうのが出現して、自分もそういうのに参加して一緒にできるようになった。声を上げる機会ができた。

写真も絶大な効果を持ちます。この場面でこういうことが起きたとか、ここがこういう状況になっていたと伝える。さらに動画ですね。

画像にしても動画にしても、1箇所、毎回決まった場所、同じことをやるんじゃないくて、違う場所でやっていますよね。東京なら東京、大阪なら大阪。東京でも民団の前だとか、朝鮮総連の前だとか。銀座でデモが行われたときにこうこうこういうことがあったとか、在日と衝突したとか。そういう多様な場面、多様な場所、多様な運動というのがいろんな関心を呼びますね。

(アクセスが)一番多かったのは、行動している2007年——平成19年から2010年くらいまでですかね。(アクセス数が減ったのは)やっぱり近代の否定とか言い出したら、奇抜な思想にはついていけないという読者からの感想はありましたね。それでも自分なんかは——烏合の衆とっては悪いけど——烏合の衆に迎合して人気を保つよりも本来的に主張したい、主張すべきだと思ったことを主張するためには、読者とか支持者が減っても本当の志を同じくする者と意見を共有する、志を同じくする者と歩んでいく方が今は重要なと思いますね。

8. 外国人参政権から攘夷へ

かなり前、私達が東京に出てきた当時から外国人参政権というのは国会に提出されて、たびたび問題になってますが、「これは大変だな」というような具合で。ただ、その当時というのはどうしても背後に在日の存在があるとか、あまりそういう強い意識というのはないですから。まあ、朝鮮国籍の人間に、韓国国籍の人間に参政権を与える、これは道理としては通らないなというくらいで、在日というのが民族問題であるというのは捉えられなかったですね、当時はね。

皆さん、不法滞在者を追い出せばいいとか、外国人犯罪だけを追放すればいいとかいう発想ですけど、外国人を入れること自体は誤りであると。明治以降から始まった帰化制度にしても、それ自体が誤りであって、そんなものが存在しなかったそれ以前に戻るべきなんだと主張してまして。最初は不法滞在、その次に外国人労働問題全般、その次に在日問題も加わってきて、さらには帰化の問題。段々変遷はたどっていますね。自分の中ではそれは進化だと捉えていますけどね。

今も右翼全般にそうですけどね、民族問題に対する意識があまりにないですね。どうしても右翼というのは近代から発生したものであって、日本の近代は明治の開国からスタートして。朝鮮半島、台湾に進出して、そういったものすべてが同じ日本人だと、さらに世界交歓というのかな、天皇陛下のもとに皆平等なんだと。そういう発想のもとに來ていますから、どうしても民族問題という考え方にはならないんじゃないんですかね。

(参政権に関心を持つようになったのは)実際に私達が行動する保守として街頭に出てからですね、本格的に。在日という民族問題があるから、在日社会が存在するから外国人参政権法案が出てくるんであって。在日社会を解体または排除しない限り永遠に続くんだという、強い民族問題に対する意識を持ちまして。在日社会を叩かない限り参政権はどの政権になっても出てくるし——自民党であっても民主党であっても出てくるし。「最初に朝鮮人の参政権が実現して、その後に必ずシナ人の参政権が実現してくるよ」と、そういう戦術に基づいて当時は行われてましたね。ただ朝鮮人だけを叩くんじゃなくて、大本のところでシナ人をバンと叩かなければだめなんだと。実際に在日がデモしたり直接対峙するようになりましたから、よりそういう問題を目の前の問題として捉えるようになりましたよね。それまでは在日のデモとか全然見たことなかったですから、「こういう問題があるんだ」というぐらいな、「けしからんな」というぐらいで。

明治になって近代政治ができて、最初は男性だけに参政権が認められて、次に戦後になってから女性に拡大して、さらに今現在外国人まで拡大しようと、男女共に。近代政治の流れからみていくと、そこに行き着くのかなと。明治以来ずっと開国できましたから。さらに戦後になって本格的に選挙権まで開国していくと。在日、同和、あらゆるものがはびこるようになったのは近代政治だからこうなのであって、これをやめなきゃいけないのかなと。選挙制度自体が国にとって何もいいことないんであって——参政権云々に限らず。

外国人問題の大本となったらどこなのかという、最終的に突き詰めていくと明治の始まり

だったんじゃないかなというところに行き着きますよね。この明治の体制というのが今も続いているんだと。私なんか、今までは——つい最近までは戦後のみが悪くて戦前というのは非常に理想的な形だったんだと思ったんですけど。むしろ戦前というのは戦後よりも悪くて、朝鮮人、シナ人というのを同じ日本人だと言ったわけですよね。今、特別永住資格といってますけど、むしろ戦前のほうが悪くて、そっちに戻ると今より悲惨な状況になるんだよというところに行き着きまして。ですから明治から現在まで続く近代というもののあり方自体を含めて考えないと、私たちが理想とする攘夷、排外という形には行き着かないんじゃないかなという結論といえますか、そういう回答に行き着きますよね。

近代から始まった問題でいえば帰化制度ですよ。外国人参政権に反対なのは当然なんですけど、参政権がほしければ帰化しなさいとかそういうのは誤りですよ。明治以降ずっと自民党政権の中でも帰化制度というのはずっと続いてきたのであって、そういう売国政策がずっと続いてきた中で参政権だけを反対するというのは、ちょっと違うんじゃないかと思いますね。参政権だけであれば選挙に投票する権利ですよ。ところが帰化もできてしまう、日本人になってしまうということは選挙も当然投票もできるし、立候補もできる、公務員にもなれる、日本人としてのあらゆる方途が開けるのであって。今何が起きているかという、日本人の中に異民族ができて、中国系日本人だとか韓国系日本人だとか、そういうことを主張してはばからない輩がいる。日本国籍でありながら生活とか思考は朝鮮人のまま中国人のまま、そういう人を増やしているのであって。それなら帰化を一切認めないで、外国人のまま選挙権を与えたほうがむしろ管理できるんじゃないんですか、そういう考え方もできますよね。

昔(の自分の考え)は近代という枠の中でどう国難を排除していくか、外国人を排除していくかだったんですけど、国難とか外国人とかすべて近代に起因するのであれば、政治自体がおかしいんじゃないかと。近代が始まって——明治から平成の——150年もないですよ。一方で武家時代というのは600年も700年も続いていた

わけであって、それを考えれば明治にしても戦前にしても、そこが日本人が立ち返るべき本来の姿かという、全然そうじゃないわけであって。むしろそれ以前に日本人だけで共同体を営んでいた時代があったわけで、そちらが本当の正解なのかなという風に思いますね。

武家時代は本当の意味で鎖国が実現されてましたし。鎖国で国内の中が悲惨になっているとかいうわけではなくて、むしろ今よりもかなり潤っていて資源も生かされてましたし、経済も国内で循環していた。お金も国内できちんと循環していた。であれば、今のいびつな——今の形がこれだけいびつになっているのであって——むしろそっちの方に志向としては戻るべきではないかと。民族問題が発生した原因は近代にあるわけであって、強いて言えば——大雑把ですけど——近代の全否定となりますかね。法案といえ、たとえば参政権問題だけを追及してもどうにもならないですね。参政権を阻止するというのは、結論したら帰化しなさいということにしかないわけであって、帰化制度自体が問題だから近代がここまで来ているわけであって。帰化制度自体をなくさないといけないですね。それをなくすには近代以前に戻りなさいということだから。

9. 結語に代えて

η氏は、日本の排外主義運動の中でもっとも極端な主張をしているが、これはひとつには彼がいわば専従に近い形で排外的な活動に携わっていることによるだろう。彼がいう武家時代への回帰が、再帰的近代の段階に至った現時点で一顧の価値があるか否かは、他に「本業」を持っていればすぐに判断がつく。一方で、他の排外主義運動の活動家の議論が矛盾に満ちているのに比べると、氏の議論には——実現可能性はさておき——一貫性があるともいえる。

η氏のもう1つの特徴は、「外国人労働者」に対する嫌悪感から排外主義運動に馳せ参じたことにある。1980年代後半以降の「外国人労働者流入」は、右翼による排斥運動を生み出さなかったが、その数少ない例外たるη氏は2000年代後半の排外主義運動の源流の1つとなった。7節で彼が言及した4人のうち1人は、国家社会主義

者同盟時代から上野でイラン人を排斥してきたが、あとは反中国、反韓国、盾の会と出自が異なる。2007年の街頭行動を共通項とした共同戦線により、在日コリアンの排斥運動が成立した。かつて筆者は、排外主義運動の担い手の多くは「反周辺諸国」から外国人排斥へと絡め取られたと述べた（「排外主義運動のミクロ動員過程」『アジア太平洋レビュー』9号、2012）。だが、その源流には η 氏も含めてそれとは異なる系譜もあったわけで、それが「在日特権」へと収斂して運動を展開しえたことが、運動の「成功」の1つの要因だといえる。

（付記）本稿は科学研究費補助金による研究成果であり、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。